

Title	バードウォッチャーの価値認識と満足度の研究 : ラムサール条約湿地片野鴨池における比較研究
Author(s)	敷田, 麻実; 大畑, 孝二
Citation	日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 13: 129-132
Issue Date	1998-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16779
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 1998 日本観光研究学会. 敷田麻実, 大畑孝二, 第13回日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, 1998, pp.129-132.
Description	

バードウォッチャーの価値認識と満足度の研究：ラムサール条約湿地片野鴨池における比較研究

The comparative studies of visitor satisfaction at Kamoike wetland

敷田 麻実¹ 大畑 孝二²

SHIKIDA Asami OHATA Koji

本研究は、石川県加賀市にあるラムサール条約湿地片野鴨池への訪問者が、片野鴨池や野鳥を評価する背景を調査し、その満足度や特性を比較分析することを目的とした。片野鴨池は1993年に国設片野鴨池鳥獣保護区特別保護地区の指定を受け、同年6月には「ラムサール条約」による登録湿地として認定された。片野鴨池には、毎年1万羽前後の野鳥が飛来し、野鳥観察に適した場所として有名で、年間3万人近くが訪れる。バードウォッチングは、野鳥の観察を目的とする非消費的な(non-consumptive)観光・レクリエーション活動であり、エコツーリズムの一例であると考えられる。エコツーリストが何に満足を感じるかは、目的地が提供する観光資源のあり方に大きく影響を与え、エコツーリズムが持続的であるかどうかのカギとなる。そこで本研究では、片野鴨池へ来訪するバードウォッチャーの背後条件を評価するとともに、その満足度や特性を一般の観光客との比較研究によって明らかにし、エコツーリズムの発展に寄与する。

Keywords: エコツーリズム、バードウォッチャー、湿地、片野鴨池、石川県、野鳥観察

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の対象

本研究の対象は石川県加賀市にある片野鴨池とした。片野鴨池は1969年に石川県の天然記念物の指定を受け、さらに1993年には越前加賀海岸国定公園の第1種特別地域に指定されている。また、1993年に国設片野鴨池鳥獣保護区特別保護地区の指定を受け、同年6月には「ラムサール条約」による登録湿地として認定された¹⁾。

(2) 片野鴨池の歴史

片野鴨池は、江戸時代はじめから、夏は水田として利用するが、冬場は水を張った水田にガン・カモ類が多く飛来する湿地になることで知られていた。このような季節的な利用方法の入れ替えはごく最近まで行われており、地域住民による利用と野鳥の保護(休息場所の提供)のバランスをとっていた。これは、ガン・カモ類の糞が肥料になり土地が肥えるので、水田耕作の農民にとっても野鳥の飛来による利益があり、逆に野鳥にとっては、こぼれた糞(もみ)が餌になるという、相互の利益があったからである。

しかし片野鴨池に飛来するカモは、狩猟の対象でもあった。たも網をカモの群めがけて投げ上げたことを起源とする伝統の坂網猟(さかあみりょう)によるカモの捕獲は江戸時代の1688年前後から始まっている。ただし地元の大聖寺藩は、片野鴨池への一般民の立ち入りを禁止し、武士だけが鍛錬のために鴨猟を行っていた²⁾。このように野鳥の捕獲だけでなく、管理しながら狩猟する場として片野鴨池は運営されてきた。いわば、公的な管理の下で利用が進められてきたと考えられる。

明治時代以降は、銃による捕獲は禁止されたが、武士以外の民間人にも狩猟が解放された。そして地元の大聖寺捕鴨猟区協同組合による鴨猟が継続し、明治時代末の最盛期には、毎年5,000～7,000羽のカモを捕獲していた。そして現在も狩猟が続いている。

(3) 片野鴨池の現況

最近でも片野鴨池には、毎年1万羽前後の野鳥が飛来する。そのため狩猟場としての機能は、引き続き維持されている。それは、市条例に基づき捕鴨猟区組合が鴨猟を管理し、持続的に利用するという形を取っている。最近の捕獲数は年間400羽前後である³⁾。

*1 金沢工業大学環境システム工学科

*2 (財)日本野鳥の会サンクチュアリセンター

同時に片野鴨池は、野鳥観察に適した場所としても有名になり、昨今のバードウォッチングブームもあり、冬季を中心に多数の来訪者がある。加賀市が1984年に新たに片野鴨池に設置した鴨池観察館には、ラムサール条約認定の前後から多数が訪れ、平成9年度も26,000人が鴨池観察館に入館している⁴⁾。鴨池観察館では、加賀市から委託を受けた日本野鳥の会のレンジャーが中心となり、来訪者への情報提供や解説、自然観察会を開催している。特に冬季の野鳥飛来時期には、貴重な自然観察の機会になっている。

また加賀市は温泉観光地、加賀温泉郷で有名で、毎年250万人の温泉観光客が訪れる⁵⁾。こうした観光客も鴨池観察館を観光地での訪問先の一つとしているので、片野鴨池には、バードウォッチャーとともに一般の観光客も訪れる。

(4) 鴨池の自然環境とその紹介

鴨池付近の自然環境については、地元自治体による調査が行われており⁶⁾、自然環境そのものについての理解は進みつつある。しかし、鴨池観察館や片野鴨池周辺の自然環境を利用する来訪者の実態や特性については、研究や調査報告がほとんどなく、鴨池観察館の来訪者管理や来訪者への情報提供を行うにしても、満足な情報が少ないことが指摘されていた⁷⁾。

鴨池観察館のレンジャーによる情報提供や、ガイドは頻繁に行われているが、来訪者全員が参加しているわけではない。特に、自然環境を素材にした学習、いわゆる環境学習の必要性が高まっている現在、鴨池を素材にした優れた学習プログラムのさらなる提供が求められていると考えられる。

しかし利用者に関する情報が少ないことから、今後提供する情報やプログラムの検討に際し、どのような内容が望まれているか、どのような提供が適切かが十分検討できない状況にあった。

(5) 研究の目的

最近、国際的にも国内的にも注目されているエコツーリズム（環境に与える影響を最小にしながら自然環境を楽しみ、そして地元観光地にも貢献する観光）は、従来の観光とは違い、環境に与える影響を減少させると期待されることが多い。それはエコツーリストの行動が、一般観光客に比較して自然環境に与える影響が小さいからであるとされている。そのため、一般観光客より環境配慮の点で優れた、エ

コツーリストを集めることは、エコツーリズムにおける大きな課題でもある。

しかし、こうしたエコツーリストと一般観光客の特性の差を調査研究した例は少ない。むしろ「エコツーリストのあるべき姿」が追求されている傾向が強い⁸⁾。筆者は以前、石川県の舳倉島において、バードウォッチャーの自然認識や満足度などの特性を調査し、自然環境を対象とする観光客（エコツーリスト）が示す特徴的な性質を明らかにし⁹⁾¹⁰⁾、エコツーリズムの発展に有効な知見を得た。

そこで本研究では、調査対象を鴨池観察館の来訪者とし、一般観光客とバードウォッチャーの特性の差を解明することを試みた。そしてエコツーリストが一般観光客と、どのような差違を背景に持つかを明らかにし、そこからエコツーリズムの今後の発展に貢献する知見を導き出すことを目指した。

2. 研究の方法

1996年2月から1年間、片野鴨池の野鳥や自然を観察することができる鴨池観察館で調査を実施した。この施設は加賀市が設置し、日本野鳥の会に運営を委託している。ここは片野鴨池で、冬期間に間近に野鳥観察ができる唯一の場所である。観察館への来訪者（大人だけを対象）を無差別に抽出し、アンケート調査を実施した。調査は平日と休日の両方を行い、観察館の入口で来訪者に直接用紙を手渡して、滞在時間中の記入を求めた。その結果、年間を通して838名の有効回答を得た。また必要に応じて来訪者のインタビューや行動観察を実施した。

なお統計処理については、加納・浅子¹¹⁾および中村ほか¹²⁾を主に参照した。特に断りがない限り、検定には χ^2 検定を用いた。

3. 結果と考察

(1) 鴨池観察館での滞在時間

滞在時間が30分以下の来訪者が全体の50%以上を占め、逆に1時間以上数時間まで滞在した来訪者は約20%と少なく、鴨池観察館での滞在は比較的短時間であった。30分という時間は、野鳥観察と観察館の展示を一通りみるために必要な時間であると考えられ、レンジャーが経験的に認識していた滞在時間と一致した。また訪問回数が増えると観察も熱心になることが期待されたが、訪問回数と滞在時間の間

には、明確な傾向は表れなかった。

バードウォッチングを目的とする来訪者、バードウォッチャーと一般観光客の滞在時間には、差があった。一般観光客の滞在時間が30分以下であったのに対し、バードウォッチャーのそれは60分、さらにはそれ以上に及び、バードウォッチャーが、より長時間滞在し、野鳥を観察する傾向が確かめられた(図1)。特に北陸地域以外からの来訪者でこの傾向は顕著であった(図2)。

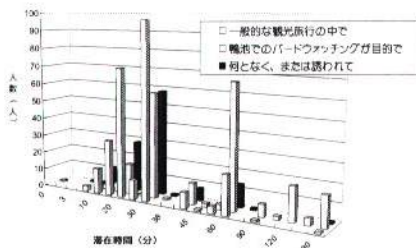


図1 訪問者の種類別滞在時間

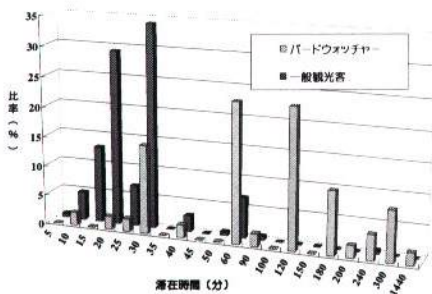


図2 北陸以外から来訪した来訪者の滞在時間

(2) 訪問回数の差と訪問先

バードウォッチングを目的とする来訪者は訪問回数が2回以上、多い場合には10回を越えるのに対し、一般観光客は1回目の訪問に集中していた(図3)。石川県内と県外の訪問者数の比率がほぼ50%であ

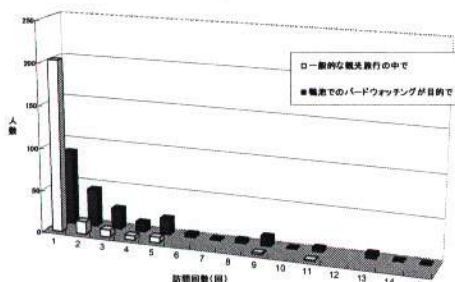


図3 来訪者の種類別既訪問回数

り、出発地からの距離が近いことだけが訪問回数に影響したのではないので、やはり野鳥の観察が複数

回訪問の強い誘因となっていると考えられる。

またバードウォッチャーは、地元加賀市以外に訪問先がないと回答した割合が高かった(69%)。しかし、一般観光客ではその比率が56%あり、片野鴨池が複数の訪問地のひとつであることが示された。

(3) 訪問に要する費用

バードウォッチャーと一般観光客の片野鴨池旅行に要した費用の比較では、バードウォッチャーが5,000円以下が中心であったのに対し、一般観光客は15,000円以上と明らかな差が出た(図4)。一般観光客には温泉旅館宿泊者が含まれているので、このような差になったと考えられる。

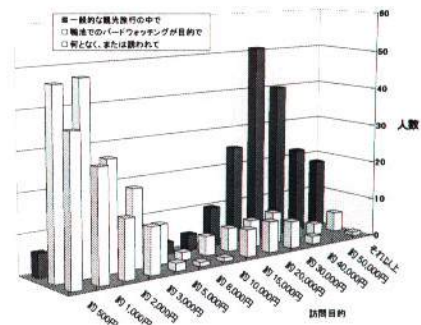


図4 来訪者の旅行費用の比較

(4) 団体人数の差と交通手段

来訪者の団体人数を図5に示す。バードウォッチャーが1人か2人という少人数なのに対し、一般観光客は4人以上の団体が主流で有意な差があった($\chi^2 = 49.8, p < 0.01$)。これは一般観光客が定期観光バスや温泉観光を目的としたバスツアーで片野鴨池に立ちよることが多いのに対し、バードウォッチャーは、同好の仲間との少人数の訪問が多いからだと考えられる。

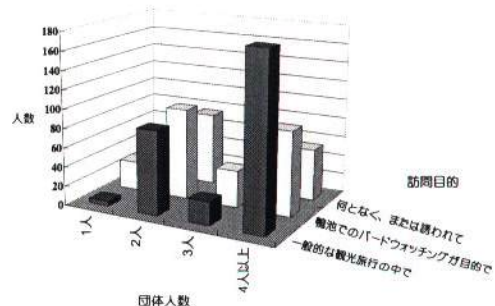


図5 来訪者別の団体人数

交通手段は、一般観光客は主に観光バスやJRを選択しており、バードウォッチャーが自動車を利用す

る傾向とに差がみられた。

(5) 片野鴨池の認知度と満足度

バードウォッチングが目的の来訪者の 66 % が、片野鴨池についてよく知っていたのに対し、一般観光客は 21 % であった (図 6)。逆に一般観光客の 50 % が片野鴨池について全く知らなかったという有意な差があった ($\chi^2 = 157.2, p < 0.01$)。バードウォッチン

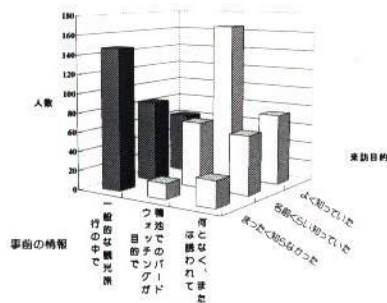


図6 来訪者別の事前情報充足度

グを目的として来訪するためには、鴨池の野鳥についての知識や情報が必要であるので、このような差が生まれると思われる。

一方満足度の比較では、一般観光客の満足度に対して、バードウォッチャーのそれが高い傾向が示され ($\chi^2 = 12.6, p < 0.05$)、事前情報の豊富さや野鳥についての知識の差が、目的地での満足度の差につながっていると考えられる。

また、バードウォッチャーは、レンジャーによる解説や野鳥そのものに満足し、一般観光客は野鳥と鴨池の自然環境全体にも満足を示す傾向が認められた。館内のショップに魅力を感じた者は、一般観光客・バードウォッチャーとも、野鳥や自然環境に比較して少なかった (図 7)。

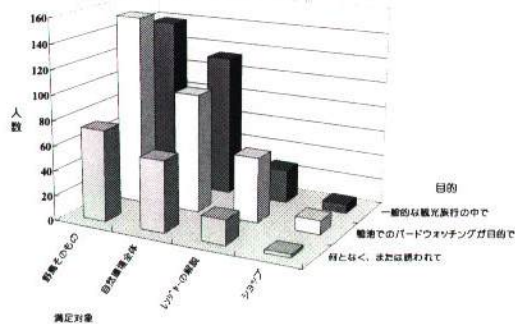


図7 来訪者別の対象別満足

4. 結論

本研究は、今まで同一グループとして扱われがちであった一般の観光客と、特定の自然環境に興味を持つバードウォッチャー (エコツーリスト) の差に注目して調査し、両者の特性や環境に対する満足度の差を生む背後条件を分析した。

その結果、バードウォッチャーは、対象とする自然に関する事前の情報も豊富であり、野鳥の観察を動機として複数回訪問し、1回の滞在時間も長い傾向が明らかになった。そして、満足度も高くなることが示唆された。またバードウォッチャーは、野鳥そのものやレンジャーのガイドなどによって満足度に影響を受けると考えられる。

さらに、このような特性がエコツーリストにあると考えられるので、エコツーリズムとして優れているかについて、滞在時間や訪問回数、事前情報から評価することも可能であると予想できる。

今後、このような分析の結果は、エコツーリストの満足度向上や提供するソフトの設計に活用できると思われる。また利用者の背後条件調査がなければ、エコツーリストや一般の観光客の特性に応じた来訪者管理ができないことも示唆され、利用者の満足度を高めながら、自然環境の持続的利用を進めるエコツーリズムの発展にも有効であると考えられる。

5. 参考文献

- 1) 大畑孝二・下野伝吉・丸谷聡 (1998): 加賀市片野鴨池における休憩用人工物設置の水鳥類の利用について, STRIX, 16, 127-134.
- 2) 大畑孝二 (1997): 人と湿地の生きものたち, ラムサールシンポジウム新潟 1996 報告書, 112-113.
- 3) 日本野鳥の会 (1995): 片野鴨池環境事業調査報告書, 143.
- 4) 日本野鳥の会 (1998): 加賀市鴨池観察館平成 9 年度事業報告書, 134.
- 5) 加賀市産業部 (1995): 商工観光労働行政主要施策の概要, 18.
- 6) 日本野鳥の会 (1997): 片野鴨池昆虫調査報告書, 25.
- 7) 大畑孝二 (私信).
- 8) 敷田麻実 (1994): エコツーリズムと日本の沿岸域におけるその可能性, 日本沿岸域会議論文集, 6, 1-15.
- 9) 敷田麻実 (1996): バードウォッチングの経済的価値, 社会環境研究, 創刊号, 45-56.
- 10) 敷田麻実 (1996): 舳倉島のバードウォッチャーの実態分析, 日本観光学会誌, 29, 55-65.
- 11) 加納悟・浅子和美 (1992): 入門経済のための統計学, 日本評論社, 326.
- 12) 中村隆英・新家健精・美添泰人・豊田敬 (1992): 経済統計入門 - 第 2 版, 東京大学出版会, 374.